慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会調査に関する若干の基本的考察
Sub Title	
Author	小島, 栄次
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1933
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.27, No.8 (1933. 8) ,p.1099(65)- 1123(89)
JaLC DOI	10.14991/001.19330801-0065
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19330801-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社會調査に關する若干の基本的考察

小島榮次

一　緒言

社會狀態の調査が社會問題の取扱に缺くべからざるものであることは云ふまでもない。吾々が實地の見聞から社會問題の存在を認め、吾々の社會的感情に刺戟を受けたとしても、現今の複雜を極めた而して絶えず變化し行く社會に於いて、吾々の耳目が科學に依る訓練を受けて居なかつたならば、果してそれは眞相を把捉して居るかどうか、先づそれが疑問でなければならない。而して次にはその問題の解決の爲めに採るべき方策を決定することは、吾々の常識的觀察の結果を以つてしては更に一層困難である。調査は先づ問題の存在を明かにし、更にその性質・原因・豫測さるゝ結果等の諸點を明かにすることに貢獻し、從つて又對策の樹立を援けようとする。社會調査が問題の存在を明示して一般世人の社會的感情を刺戟し、何等かの對策に向つて輿論を喚起する力を有する事實は、往々にして見らるゝところである。例へば一九〇七―一九〇八年の米國ピッツバァグ市に於ける調査の如き、その報告に依つて始めて問題の重大なるを知つた市民をして翕然として諸種の改良運動に趨かしめるに至つたのみならず、他の多くの都市をして同種の調査に着手せしめるに至つた。(Paul U. Kellogg and Neva R. Deardorff, Social Research as

Applied to Community Progress, in the Proceedings of the First International Conference of Social Work, Vol. I, Paris, 1929. pp. 793-796. 參照）ディッケンスやラスキン或はカァライル等の作品が一般世人の關心を貧困階級の狀態に向はしめたところは實に多大であるが、しかも貧困者の生活狀態改善の爲め何等かの實行へと世人を進ましむる直接の力から云へば、右のピッツバァグ調査の如きには遙かに及ばぬのである。故に斯くの如き見地からしても、社會調査の技術を研究することは極めて有意義なりと云ふべきである。然し單にこれだけではない。それは社會科學の進歩の上にも重大な意義を有して居る。

抑〻社會狀態の調査は、初め一國或は一地方の政府に依つて、その行政上の必要に基き古い時代から行はれて來た。例へば課稅上に必要なる諸調査の如きこれであつて、ボゥリィはこれらを管理的統計と稱び後世の科學的統計と對比せしめて居るが、これらは本來政府當局の行政上の目的を以つて行はれたものであるから、それが一般に公表されてもその非科學性の故に何等重大なる效果を現し得なかつた。（A. L. Bowley, The Nature and Purpose of the Measurement of Social Phenomena, London, 1915. pp. 5-6. 參照）社會狀態の改善特に貧困階級の生活狀態改善を目的とし乍らも、しかも可及的に偏見を脫した公平な冷靜な態度を以つて行はれた調査が發表されるに至つて、始めて社會調査はその重要性を發揮したのである。まことに目的の點は姑く措き、斯くの如き公平冷靜な態度を以つてひたすら社會狀態の闡明を行ふものをこそ社會調査と稱すべきであらう。P. G. Fréderic Le Play の Les Ouvriers européens, Paris, 1855; 2. ed., 6 vols., Tours, 1877-79. 及び La Réforme sociale en France, 2 vols., Paris, 1864; 7. ed., 3 vols., 1887. Charles Booth の Labour and Life of the People, 2 vols. and an appendix volume, London, 1889-91. 及び Life and Labour of the People in London, 17 vols. and 1 vol. of maps, London. 1902-3. B. Seebohm Rowntree の Poverty; A Study of Town Life, London, 1901. 等は、恐らく斯くの如き性質を有する社會調査の嚆矢である。これら調査の場合でもさうであるやうに、一體に初期の社會調査に於いては、貧困排除の希望から出て貧民の生活狀態を調査することに重點を置く場合が多かつた。初期の社會調査は斯かる關心の下に發達して來たのである。然し乍ら一切の社會現象が相互に關聯を有しそのいづれをも孤立的に取扱ふことの誤りなるを認めれば、貧困の調査は更に廣範圍にわたる社會調査の一部分に過ぎぬと云はねばならぬ。（Bowley, op. cit., pp. 3-4.）ピッツバァグ調査の後に米國各市で行はれた調査は、單に貧民救濟のみならず都市農村の經營或は都市計畫全般に寄與する目的を持つものであり、從つて貧困狀態のみならず廣く社會狀態全般にわたる調査であつた。斯くの如く調査の對象に於ける變化が、同時に調査目的の上に於ける變化と結合して生じたことが注意される。然し更に今世期初め米國シカゴ大學に於ける社會學者の一群が、所謂局所踏査法（ロツカル・サアヴエイ）を社會學研究方法として用ふるに至つて、社會調査は社會科學殊に社會學に資料を提供することを目的として盛んに行はるゝに至り、社會調査の重要性は頓に增大した。それは最早特定の局部的問題を解決する一つの技巧たるに止まらずして、社會科學研究の一技巧へと發展し、社會科學の進歩に貢獻することに依つて、更に根本的たる重要性を獲得したのである。斯くして現今の社會調査法の研究は、とりも直さず社會科學研究の技巧に對する研究となつた。それは社會科學に携る者・社會事業に從事する者・或は社會行政の衝に當る者が、是非とも行はねばならぬところである。まことに Emory S. Bogardus の云ふが如く、「調査の性質に就いての調査は現下の緊急必要である。」（Bogardus, Contemporary Sociology, Los Angeles, 1931. p. 407.）以下その本質に就いて若干の考察を加へたいと思ふ。

二　社會調査の對象

社會調査の本質を明かにする爲めに先づその對象に就いて述べよう。前節に於いては、社會調査を社會狀態の調査として、恰も社會狀態が調査の對象なるかの如くに一と先づ述べて置いた。然し本節に於いて調査の對象を改めて考察するに際して、先づこの社會狀態なる言葉を社會現象なる言葉に置き換へて置きたいと思ふ。蓋し社會狀態なる言葉は、その意味するところが漠然として居り、科學的正確さを缺いて居るからである。例へば貧困者生活狀態・人口の體性別年齢別人種別職業別等の構成等は、社會狀態と稱んでも適當かも知れぬが、例へば社會的移動、集團の個人に及ぼす影響等を狀態と稱ぶことは、この言葉が普通に用ひられて居る意味から云つて適當ではないやうに思はれる。さて、前節述べた樣に、社會調査と稱ばれるものの中には、（一）貧困者救濟の爲めの努力の一部分である貧困調査の如き社會事業遂行の爲めの一技巧としての調査、（二）都市或は農村の經營その他の爲めの技巧としての社會調査、及び（三）社會科學特に社會學に寄與せんが爲めの調査即ち社會學研究の一技巧としての社會調査等、相異なる幾多の「社會調査」が含まれて居る。この最後の種類は即ち社會學的調査と稱せられる。何故、社會調査に依つて寄與される科學が社會科學中特に社會學であるかと云ふに、度々繰り返す如く社會調査はその初期に於いては主として社會問題解決の爲めの調査であり、從つて經濟學・政治學その他の社會科學の對象たる經濟現象・政治現象等の社會現象は、大部分斯かる社會調査本來の對象ではない。社會問題解決に最も密接に關係ある社會現象は社會現象の中で最も基礎的のものであつて、これら社會科學の對象に屬せず社會學の領域に屬する社會現象である。斯くして社會學的調査が社會調査の重要な部分を占むるに至つたのであるが、こゝに一應注意をして置きたいのは、社會學的調査を以つて社會調査と同義に用ひそれに對して何等の說明も加へぬ人々（Park, Bogardus, and Lundberg その他）がある。然し前述の如く社會學的調査は社會調査の一部であつて、全く同一のものでもなく全く別なものでもない。社會調査の一部――蹤ひもなく最も重要な一部が社會學的調査であり、社會學研究上の一技巧である。しかも現代社會學に於ける主要傾向は、益々斯かる調査の重要性を增大せしむるものの如くに見える。現代の米國社會學者中最も重きをなし、且つ社會調査に於ける最高權威の一人と看做さるべき Robert E. Park に從へば、社會學發展の全期間は次の如き三期に分けられる。即（一）コント及びスペンサァの時代。社會學が歷史哲學であり進化の「科學」であつた時代。（二）諸「學派」分立の時代。社會學的思索が諸種の學派に別れて各自その見地を規定し、社會學の問題に解答を與へる爲めに社會學が探求せねばならぬ種類の事實を敍述することにのみ忙しかつた時代、（三）探査及び調査の時代、社會學は今や正しくこの時代に入りつゝある。（Robert E. Park and Earnest W. Burgess, An Introduction to the Science of Sociology, Chicago, 1924. p. 44.）即ち後述する如く社會學最近の主要傾向は、「社會の自然科學」として社會學を認識し、自然科學の研究方法を與ふ限り適用せんとする點である。以下斯くの如き社會學的調査の對象を、パァクの分析に從つて略述したいと思ふ。（Ibid., pp. 46-57 參照）

（一）パァクは先づ最初に社會問題の一つの分類を行ふことに依つて、社會學的調査が如何なる社會現象を調査するものであるかを示して居る。即ち如何なる社會又は集團に於いても認められる三つの局面に應じて、A、組織及び管理の問題、B、方策及び政治（立法）に關する問題、C、人間性に關する問題である。例へば紐育市都市調査局が、同市經營上の能率增進を目的として行つた調査の如きはAに屬し、ピッツバァグ調査その他のラッセル・セェヂ財團の主宰する多くの調査の如きはBに屬する。先天的及び後天的性質の問題即ち遺傳と優生學・異常精神狀態の研究の如きがCに屬する。この三種の問題中CはA及びBに對して基礎的な意義を持つ。本能・習性・傳統は人間性と吾々が稱するものを構成するが、これに基きこれを背景としてA及びBが規定されて來る。但し人間性の方面調

査は、從來比較的に等閑に附せられて來た。（二）次にこれらの社會問題の各々は又、社會集團の型に從つて更に次の如く分類される。社會集團の型とは、A、家族、B、言語的（人種的）集團、C、局所的及び地域的共同體（近隣・農村及び都市共同體）D、爭鬪集團（國民・黨・セクト・勞働組織・ギャング・等）E、調節集團（階級・カスト・職業集團・宗派集團）である。（三）次にはこれら社會集團の組織及び構造の分析に依つて更に調査の對象が示される。即ち典型的社會集團の組織及び構造を明かにするのみでなく、その社會問題に對する關係を示すことを目標として分析を行へば、社會集團を組織し構成して居り且つ社會問題に關係ある重要な事實として現今一般に認めらるゝものは次の諸事實である。A、統計上の事實（出生死亡疾病犯罪の數・地方的分布・移動性・附帶事項）B、制度に關する事實（地方的分布・分類即ち產業的宗教的政治的教育的福利及び相互扶助的諸制度・共同體的組織）C、社會的遺產に關する事實（集團に依つて傳へられたる慣習及び傳統特に宗教・娛樂・閑暇時・社會統制に關するもの）D、輿論の組織に關する事實（黨・セクト・閥・新聞）。これは靜態としての社會集團の分析であつて、次に動態としての分析が必要である。（四）そこで社會過程及び社會進化が次の如く分類される。A、歷史的過程（社會的經驗を蓄積し保存する過程）B、文化的過程（社會形式及び社會型を形成し規定する過程）C、政治的過程（論爭に關する過程）D、經濟的過程（價格及び價値の交換に關する過程）社會は斯かる過程に於いて進化するが、社會的變化は單に進化のみでなく、社會の組織分解及び再組織の過程が存在する。從つて更に、A、分解（社會的分解の現れ及び測度としての移動增進・不安・疾病・犯罪）及びB、社會的運動即ち再組織（a、群衆運動即ち暴動・罷業その他、b、文化的復興即ち宗教的・言語的・等の運動、c、流行即ち衣服・慣習・社會的儀式・等に於ける流行、d、改良即ち社會政策上及び管理上の運動、e、革命即ち制度及びモゥレスに對する革命）に分類される。（五）

最後に、あらゆる社會集團はそれを構成するところの個人からしてその集團自身の特性を生じ、この特性は又、これら集團が編入されて居る社會構造の構成部分をなして居るが故に、結局社會生活の一切の問題は個人の問題であり、個人の一切の問題は同時に社會集團の問題である。從つて個人及び人格に就いて調査が行はれねばならぬ。即ち集團の個人に對する影響・個人の集團からの孤立（犯罪者・賣淫婦・自殺・孤立が人格に與ふる影響）・人格及び社會秩序を創造する素材であるところの個人の先天的性質・集團より更に親密なる「觸感關係（タッチ・リレエションシップ）」（母と子・性愛關係）等がこの方面に於ける調査の對象となる。

社會學的調査の對象は大體以上の如く分析せられる。貧困調査或は都市問題の調査の如き特殊の社會問題解決を目的とする調査の對象を決定する場合に、斯くの如き分析を參照するならば、調査は自ら最も效果多き方向に向けられるに相違ない。即ち技術たる社會事業・都市及び農村經營・都市計畫・等が、科學たる社會學の成果をその實踐に利用する關係が、こゝにも認められるのである。而して斯く考へ來れば、社會調査法の研究は主として社會學的調査法の研究にほかならぬ所以が容易に了解される。同時に又、前述の如く社會調査と社會學的調査とを同義語として取扱ふ人々の多い理由が了解される。全く社會調査は社會學的調査そのものではないが、社會調査法の研究に當つて、社會學的調査法のみを考究することは、一應は妥當な態度と云ひ得る。この二つの言葉を同義語であるかの如く用ふる理由はこゝに在るのではないかと推測される。但し後述するが如く、社會學的調査のみが唯一の價値ある而して唯一の望ましき調査なのではない。

三　社會調査の目的及び任務

社會調査の本質を考究するに際して、當然先づ第一に取扱はるべきは社會調査の目的であつた。然し乍らそれは

既に緒言に於いて述べたところに依つて明かであつたから、社會調査の任務を考察する準備としてこゝに取上げることがより便宜であると思はれる儘に、先づ對象に就いて考究を行つたのである。故にこゝでは目的に就いて極めて簡單な要約を行ふと共に、何が故に社會調査が斯かる目的を到達し得るかに就いて一瞥を與へよう。

先づ社會調査の目的を大別すれば二つに別れる。即ち一は社會狀態を闡明してその改善の技術に寄與することであり、一は同樣にして社會科學へ寄與することである。前者に於いて歷史上でも現在でも最も重要なのは社會事業に對する寄與である。社會事業家は、その事業の適切に遂行されて居るか否かを正確に知るが爲めには、是非とも社會調査に依らねばならぬ。殊に社會事業の重要な特色の一つが、特定の取扱對象の特殊性に順應した取扱をなす事實に在るのだから、この點から考へても社會事業に對する社會調査の貢獻は極めて大である。社會調査に基いてこそ事業方針に正しい修正を加ふることも出來るし、それと同時に新しき事業方面に就いての正しき指導を仰ぐことも出來るのである。從つて現今の社會事業に於いては、社會調査はその正規的な一部門として看做されて居り、社會事業家が或は獨立に或は他の社會調査家と共同に調査を行つて居る。斯くして結局社會調査は社會事業遂行の一技巧として考へられて來る。(Harold A. Phelps, Sociology and Social Work, in Trends in American Sociology, edited by G. A. Lundberg, Read Bain and Nels Anderson, New York, 1929. p. 319. H. L. Lurie, Research in Social Work, in Social Work Year Book, 1933, edited by Fred S. Hall, New York, 1933. pp. 437-441. 參照)

次に都市及び農村の經營・都市計畫或は地域計畫に於いて、社會調査が次第に重要性を加へて來たことも見逃せぬ事實である。米國に於いては一九二八年一月に至るまでの一五年間に於いて、全般的社會調査が各市に於いて行はれ、この總計八一、農村に關する同樣な調査が七二、都市計畫及び地域計畫に關するものが一五〇余にも達して居る。都市及び農村經營に關する局部的の調査に至つては、非常に多數に上るであらうと云はれて居る。(Shelby M. Harrison, Social Survey, in Social Work Year Book, op. cit., p. 789.) 斯くして調査は又、都市及び農村の經營・都市計畫及び地域計畫の一技巧なる性質を獲得するに至つた。最後に社會學に於いても、社會調査に依つて歸納的研究を進むることの必要及び效果が認められねばならない。且つ又社會學者は社會を絶えず變化しつゝある組織體と看做す。人間が經驗上認め得る眞理は一時的のものに過ぎず、新しき要素が絶えず現れて事態を變化せしめて居り、從つて吾々の結論も短い期間に限つてのみ妥當であると云ふ。(Nels Anderson and E. C. Lindeman, Urban Sociology, New York, 1928. p. 376.) 從つて一學說の眞實なることを立證するが爲めにも、又研究の素材を蒐集するが爲めにも、社會調査が社會學的見地の下に盛んに行はるゝこととなつた。斯くして社會學に於いても亦、社會調査はその研究の技巧と看做され、恰もその正規的なる一部門たる觀を與へるのである。然し乍ら社會調査は社會學研究そのものでもなく、社會事業に關する調査そのものでもなく、都市及び農村經營に關する調査そのものでもないと思ふ。畢竟社會調査は後述するが如く、獨立せる一つの技術であつて、社會科學及び社會技術に對して寄與することを目的とするものであると思ふ。

社會調査の目的が以上の如きであるとすれば、その任務如何の問題は容易に解答が與へられよう。即ち社會科學に貢獻するが爲めにも社會技術に寄與するが爲めにも、現實の社會狀態の眞相を傳ふることが先づ第一の任務となる。而して社會科學に於いては法則の樹立の爲め、社會技術に於いては方針の決定の爲めに、夫々社會調査の結果を利用するのであるから、この第一の任務に加へて、社會科學及び社會技術が利用するに最も適切な態樣に於いて社會狀態の眞相を傳へるといふ第二の任務が生じて來る。然らば如何にしたならばこれらの任務を果すことが出來るか

といふに、一言にして云へば科學的な社會調査を行ふことである。然らば科學的な社會調査とは如何なるものか。

先づ調査一般及び科學的調査一般に就いて述べる必要がある。Frederic Austin Ogg の言葉を借りれば、「人間は多くの事物を偶然に――單にそれらに偶然行き當たることに依つて學ぶ。然し乍ら大體に於いて確然たる而して有意的の考究に依つて――吾から疑問或は問題に進み寄り解答或は解決を探索することに依つて、その知識を增加する。この意識的・先慮的考究の過程を吾々は調査と云ふ」。而して斯くの如き考究が、人間の知識に對する附加或は新しい知識獲得の基礎の發見に依つて、人間の知識の全量を增大させようとするものなる場合に、調査といふ名は最もふさわしく適用される。但しその目的が到達されると否とは問はないのである。（F. A. Ogg, Research in the Humanistic and Social Sciences, New York, 1928. P. 13.）これからして、先づ、社會現象に對する吾々の知識の增大又はその增大の基礎を目的とするものでなければ、科學的社會調査と稱し得ぬことが明かになる。次に科學的調査とは如何なるものかと云ふに、それは「一般に是認されて居る自然科學の論理及びその一般方法とに從つての考究を意味する。この方法は、資料の客觀的觀察・分類・概括・それに先行する作業假說の形成と後續する證明と・から成るものとして一般に看做されて居る。」（George A. Lundberg, Logic of Sociology and Social Research, in Trends in American Sociology, op. cit., p. 406.）この觀察・分類・概括・作業假說の形成・證明・の諸過程の各々に於いて、種々の技巧が用ひられ得ることは云ふまでもない。斯かる細部的技巧は、それが全過程と矛盾せざる限り、それ自身科學的調査の方法と稱することも出來る。然し資料は他の事實と關聯せしめて取扱はれる時にのみ科學的意義を持つのであるから、科學的調査方法は觀察された資料の分類・概括・及び證明を可能ならしめるに十分な程、客觀的・體系的であらねばならぬと主張される。云ふまでもなく客觀性は程度の問題であつて、科學的と稱せられ得るには、調査の全過程が如何なる正常人に依つても確證され得る程度まで、先慮と體系とを以つて遂行されることを要する。（Ibid., pp. 406-7.）斯くして科學的社會調査も、自然科學の方法即ち經驗的・實驗的・歸納的方法に依るものであり、且つ又客觀性と體系とを具ふるものである。斯かる客觀性を得るが爲めには、先づ調査者の獨斷・偏見が排斥され、又如何なる特殊的調査に於いても常に何等かの型を見出す見地を以つて行はれることが必要となる。且つ又その調査方法が合理的であり可及的に標準化されて居ることを必要とする。如何に重大な可能性を有すると思はれる發見であつても、例へば何等かの神秘的手續に依つて結論に到達したものの如きは科學的重要性を認めることは出來ぬし、又可及的に他の人々に依つて踏襲され得るが如き方法であることを必要とする。

以上述べたところに依つて、科學的社會調査の如何なるものなるかを略ゞ明かにした。要するにそれは社會現象の科學的調査であり、それに依つて嚢に述べた社會調査の任務は最もよく果される。然し乍ら斯かる科學的調査のみが唯一の價値ある或は望ましき方法であるわけでないことを注意せねばならぬ。蓋し知識の追求に當つては、如何なる方法にしろその目的を到達するものは、その事實に依つて、正當な望ましき方法なるが故である。科學的法則の形成のみが人間の知識に貢獻し得る唯一の方途ではない。全く體系のない主觀的な考究の結果であつても、假定・問題・解決法を暗示する點で何等かの價値を有することがある。過去の事件に就いての知識は、科學的概括の目的に全く利用され得ぬが如き形態にある時ですら、即時の調節を必要とする事態に於いて賢明な行動をとる目的に對し大なる重要性を持つことがあり得る。然し乍ら知識が最も大なる意義を獲得するのは、それが他の知識と關聯して分類せられ、意識的な概括の基礎となる時に於いてのみであることは、依然として眞實である。故に右の如き非

科學的方法の價値を認めるとはいへ、その價値は、その客觀性及び完全なる自然科學方法に對するその效用に依つて評價されねばならない。（Ibid., p. 407.）

最後に右の如き任務を果す上に於いて社會調査の當面せねばならぬ二つの重大な困難に就いて述べよう。一つは、社會學に於いては人間行動の基礎原理に對する基本的考究が重要であるのに、社會調査に於いては、より實際的な即時的に有用な方面が强調される傾向のある結果として、斯かる重要な考究が妨げられることである。他の一つは社會調査の費用の增大と共に、その資金の提供者に依つて調査が掣肘を受くることである。抑〻技術或は應用科學が純粹科學にその基礎を置いて居ることは、誰しもこれを認めぬものはない。然るに自然科學の領域に於いても社會科學の領域に於いても、實際的興味が學問的興味を壓倒して居り、米國に於いては一九二八年に自然科學の領域に於いて「純粹科學の研究者一人に就いて恐らく一二人の應用科學研究者がある。純粹科學に費される一弗に對して、應用科學には二〇弗（推算）が費される。產業に屬する研究所は、純粹科學の研究者をその勤務へ急速に引き入れ、基本的調査に從事する人員殊に大學に於ける斯かる人々を減少せしめつゝある。」（F. A. Ogg, op. cit., p. 16.）社會科學に於いてもこれと同樣な狀態が認められるのであつて、斯くの如く純粹科學の方面に對する研究的努力の欠乏は、終局に於いてそれに基礎を置く應用科學及び技術の行詰りを來たさゞるを得ない。勿論斯かる情勢を齎した要因は多々擧げられるが、その中特に注意すべきは、財政的支持の不足と便宜の不足とである。社會學の最近に於ける最も顯著なる傾向は、過去の社會學に於ける調査が書齋の安樂椅子で書かれた哲學的論考であつたのに反し、集團の構造と行動に關する現實的な研究となつたことである。而してこれは社會學に於ける調査が、一般に多數の人員・より多くの研究設備を要する場合の多くなつたことを意味する。然るに大學當局は一般にこの傾向を認めることが出來ず、從つて十分な財政的支持を與へて居ないが爲めに、より多額の費用を要する調査は大學を離れて、他の調査機關の手に依つて行はれることとなる。斯くして當然に資金の提供者に依つて調査が掣肘さるゝの虞を生じて來た。資金の提供者は自己の好ましからざる調査には資金提供を拒絕することに依つて、調査の方向に干涉し得るし、場合に依つて調査の結論も同樣にして掣肘を蒙ることがあり得る。前述の如く調査に於いて實際的關心の優勢な理由の一つは、確かにこゝに存すると思はれる。しかも單にこれだけではなく、同じ實際的方面の調査にしても、例へば工場災害の如き論爭の伴はない問題にのみ多く行はれ、失業問題の如き論爭のある問題の調査には極めて僅かの出資しか行はれない。斯くの如き障碍に依つて社會調査は、社會狀態の眞相を傳ふるといふその任務を果すことが極めて困難となるのである。（F. A. Ogg, op. cit., pp. 16-19. 63-70. 205. 330-311. G. A. Lundberg, op. cit., pp. 420-425. Jessie Bernard; The History and Prospects of Sociology in the United States in Trends in American Sociology, 1929. op. cit., pp. 56-60. Proceedings of the Ist. Int. Conference of Social Work, op. cit., pp. 836-8. 參照）

以上、社會調査の目的・任務・及びその任務遂行の方法に就いて簡單ながら述べ終つた。然しこゝで社會調査の方法として述べたところは極めて不十分であつた。蓋し科學的の社會調査とは自然科學の方法を以つてする調査であるとしながら、然らば社會現象の調査に自然科學の方法を適用し得るや否やの疑問に答ふるところも無かつたし、社會調査の技巧又は手續例へば歷史的方法・統計的方法・踏査方法・事例方法・實驗的方法・等に就いても何等言及するところが無かつたからである。これら後者に就いての考察はいづれ他の機會にゆづることとし、次節に於いて前者に關し聊か述べようと思ふ。蓋し前者の問題を考究することは、社會調査の存立の基礎に關する考究となる

が故である。

四　社會調査と自然科學的方法

社會調査に科學的と稱せらるゝものと非科學的と稱せらるゝものとがある。方法論の點に關して吾々の考究の對象となるのが前者であることは云ふまでもない。吾々の考究は社會調査を一つの技術として整備發展せしめるが爲めに行ふのであるから、前節に言及したやうな主觀的方法に依る調査は、さし當り問題とする必要がない。さて社會調査の研究者に依つて科學的社會調査が自然科學の方法を使用するものであると看做されて居ることは、前節に指摘したところであるが、こゝに、「自然科學的方法を使用する」といふ言葉を以つて、單に觀察・分類・概括の諸過程を含む經驗的・歸納的方法を使用することを意味するに止まらず、更に進んで嚴密に自然科學の方法を社會現象に適用する意味に用ふる人々がある。科學の研究方法として、社會科學の領域に於いても、經驗的・歸納的方法が思辨的・演繹的方法と相對して不可缺であることは夙に一般に是認されて居る。然し社會調査の研究に從事する一群の米國社會學者は、更に進んで從來一般に認められて居るところ以上に、自然科學的方法を適用し得ることを信じるのである。以下に斯かる主張をなす米國社會學者中の一人 George A. Lundberg の說くところを略述しよう。(Logic of Sociology and Social Research, op. cit., pp. 389-405.)

抑、或る方法が妥當なりや否やの究極の試驗は、その方法に依つて得らるゝ結果の如何に存する。求むる結果に到達し得るものならば、すべて妥當なる方法と云はねばならぬ。斯かる意味での方法は、試みと失敗とを重ねて行く暗中模索的のものから、極めて抽象的な數學問題の解法に至るまですべてを含む。且つ又一定の問題を解決するにしても、幾多の方法が可能である。斯かる場合には最も直接的であり最も確實で最も安易である方法が選ばれる。斯くの如く多種多樣な方法の存在が考へられるのみでなく、一切の方法は試驗的・暫定的のものと看做される。例へば物理學の如き極めて體系化された分野に於いては、知識附加の方法は高度に形式化され客觀化されて居るに拘らず、絕えず新しい方法が現れて古い方法とその基礎をなす論理とを覆へし或は修正して居る。斯くして結局に於いて、現在行はれて居る方法は從來の非常に多種多樣の方法の單なる殘滓に過ぎないと云ふことが出來よう。即ち多種多樣の方法の間から經驗に依つて比較的に效果多きことの認められたものが、特定の問題の型に關聯して妥當なりと認められた方法となつて居るのである。

さて、こゝに一つの方法或は論理の型にしてそれが適用された分野に於いて特に著しい成功を贏ち得て居るものが、この適者生存の過程を通じて發展して來た。これが即ち自然科學の論理と方法である。この自然科學の方法が自然界に於いて贏ち得た成功を見る時、それを社會現象の考究にも適用し得るや否やの問題に吾々が關心を持つに至るは當然と云はねばならない。斯くして「自然科學としての社會學」換言すれば自然科學の論理と方法とに基く社會學が主張されるに至るのである。この問題に對して從來一般に行はれて來た見解は、斯かる「自然科學としての社會學」の觀念に反對する。即ち、社會現象と自然現象との間に或る根本的な相違を認め、その理由に依つて社會現象研究には自然科學の方法を適用し得ぬと主張する。斯くの如き誤れる見解は、先づ第一には、科學の對象を論理及び方法と混同することから生じて居る。自然科學の論理とそれを實行に移す具體的技巧とは區別さるべきであり、具體的技巧は研究對象を異にするに從つて異ることが當然認められねばならぬ。然るにこの區別を知らぬ多くの人々にとつては、方法の考察は直ちに對象の考察となる。從つて、對象が社會現象である以上は「自然科學としての社會學」の如きは不可能であるとする主張を生ずるのである。第二には、社會現象がそれに對する自然科學

の成立が全く不可能である程、根本的に自然現象と異る性質のものであるといふ主張は、大體次の如き理由に基いて居る。即ち（一）社會現象は自然現象に比して、觸知され得る程度及び「眞實」である程度が低い。從つて又前者は、科學たるに必要な觀察及び測定の客觀性を生ぜしめ得ない。（二）社會現象は變動が絶えず且つ複雜を極める故に科學的概括を行ひ得ぬ。（三）對象の性質に於ける斯かる相違の結果として、社會現象に自然科學の方法を適用しても豫測を可能ならしめることは出來ないと。さて、これらの理由から「自然科學としての社會學」に反對する大抵の人々も、結局これらの相違が程度の問題であることを恐らく認めるであらう。然しそれにしてもこの反對論の重大さが聊かでも減少する譯ではない。蓋し科學の定義それ自體が程度の問題だからである。即ち吾々の方法の客觀性及び正確さが一定の程度に達して居る時に、その方法は科學的と稱ばれるのであつて、その程度たるや吾々がその維持を固執することに同意したところのものである。然し乍ら斯く程度の問題と解することは、二種の現象間の相違が如何なる理由に基くかといふ見地から、以上の反對論に近づくことを可能ならしめる。而して斯くする時には、社會現象と自然現象との間の差異は、この兩者に關しての吾々の知識の狀態如何に依存して居るやうに思はれて來るのである。先づ前に擧げた反對理由の（一）に於ける觸知性及び眞實性の程度の問題はどうであるか。この點に關して從來行はれて來た最も重要な學說は、自然現象が直接に「感官」を通じて知り得るものなるに反し、社會現象の大部分は、傳統・慣習・態度・その他の如き諸概念を代表する言葉を通じて、象徵的にのみ知り得るものであるとする。然し最近の心理學的研究の結果は、自然現象にしても社會現象にしてもすべて象徵的行動機構（通常は言語の形態に於ける）の作用を通じてのみ知り得ることを明かにした。心理學者に從へば、有形物も觀念も吾々は同一の方法でこれを知るのだと稱したところで、それは象徵と象徵された事物とを混同するわけでは決してない。これは單に、それらの客體のいづれを知るにも、それらの象徵化とこの象徵に對する反應とを要すると云ふ意味に過ぎぬのである。從つて、社會現象と比較して自然現象がより大なる內在的觸知性及び眞實性を有するとの見解は、吾々が自然現象に就いてより適切な象徵的行動機構を發展せしめて居る事實から生じた迷想であると思はれる。吾々の有する最も客觀的な象徵過程が、物質界の事象に關聯して發展せしめられて居ることは眞實である。然し同等の客觀性を有する一組の象徵過程が、社會現象に就いても發展させられ得ぬといふ理由はないと思ふ。

社會科學の對象が變動性及び複雜性の大なるが爲めに自然科學の方法に依る概括を行ふに適しないといふ主張も、大部分は右に考察されたやうな知識の性質に就いての誤れる見解に基いて居る。複雜性とは單に吾々が比較的に不完全に理解する事物に適用する名辭に過ぎない。即ち一定の事態に對する吾々の調節の程度を示す名辭である。又社會科學の對象の變動性が大であるといふ考へも、科學の對象の性質に就いての皮相的な見解の結果に過ぎない。人間は植物・石・氣體に比すれば無限の複雜性と變動性とを有すると云はれるが、然しどちらの場合に於いても、科學的觀察といふことは、單に、觀察と記錄の爲めに一定の客體の何等かの局面を選び出すことから成り立つて居る。一個の石にしても、その科學的觀察は地質學的・地理的・物理的・化學的の諸局面のいづれか或はその全部に就いての觀察から成り立つ。結局一個の石は無限の複雜性と變動性とを有する宇宙の一部である。それが單純に見えるのは、吾々が宇宙からその極小の一部分を選び出し、更にその或る局面に就いて觀察するが爲めである。尤も斯かる手續をとり得るが爲めには、觀察對象の諸特性が分析され分類されて居らねばならぬ。これも亦對象の內在的性質には關係なく、その對象に關聯して構成された象徵的行動機構が適切なりや否やに從つて成就されるか否か定まるのである。

最後に、人間が「意識」を有するの事實は、社會科學の對象と自然科學の對象との最も根本的な相違點として主張されて居るが、これ亦誤れる見解である。人間は「意識」を有するが故に往々にして說明の附かぬ氣まぐれや考へを起こすことがあり、これらは科學的方法の適用に依つて人間行動の豫測を行ふことを不可能ならしむると主張される。然し乍ら幸にも行動主義的心理學が、生理學の應用に基いて、「意識」及び「精神」の神祕的な諸局面を、理解され得る因果過程に或る程度まで還元して來た。「意志」「氣まぐれ」「選擇」をも含めてすべて人間の行動は、他の現象の行動と同一な一般的態樣に於いて惹き起こされ條件づけられて居るものと認められるに至つた。即ち人間行動は本來、觀察され得る刺戟—反應の過程から成り立つものと解されるのである。塔上から落とされた一片の羽毛は、極めて不規則な「氣まぐれな」豫測し得ぬやうに見える態樣で落ちて來る。然し羽毛そのものの屬性及びそれが落下する環境例へば風・濕氣等が明かにされるならば、この羽毛の落下する道は豫測される筈である。人間の「氣まぐれ」及び「意志」に就いても同樣なことが云はれ得るのであつて、一切の人間行動は、人間の屬性とその行動を惹起する刺戟とに基いて分析され得るものである。

社會現象と自然現象との以上の如き根本的の類似性が有する科學的重要性は、科學的法則の性質に就いての誤解の爲めに看過されることが屢〻である。科學的法則は、一切の條件の下に於ける現象の行動の精密な敍述でなければならぬといふ想定が屢〻行はれる。それが眞實であるとすれば、社會現象に關する法則の如きは不可能であらう。然し乍ら眞實のところ科學的法則は單に或る條件（通常極めて人爲的であるところの）の下に於いて、現象が如何なる行動をとるかを述ぶるものに過ぎない。然も吾々は斯かる法則に依り、制御されざる宇宙に於ける任意の與へられたる條件の下に於いて、現象が如何なる行動をとるかを推測する規範を與へられるのである。社會現象は複雜なるかに見えるけれども、明かに右の如き性質の科學的法則が成立し得べきであり、又斯かる法則に基いて現實の制御されざる狀態に於ける人間行動が推測され得る筈である。故に、社會現象に於いては自然現象に於けるが如き科學的法則が成立しないとの理由で、自然科學の方法の社會科學への適用可能を否定することも誤りである。

最後に次の如き反對論がある。即ち、社會學に於いて吾々の求めねばならぬものは社會現象の「說明」であるのに、自然科學の方法を社會現象に適用した場合には、それは單に社會現象を記述し得るのみであるといふ理由に基く反對論である。これも亦、科學の職分が、行動を、その第一原因を明かにするといふ意味で、「說明」することにあるとする形而上學的見解の遺物である。如何なる科學と雖も斯かることをなすと稱するものはない。科學の行ふ全部は、その研究する現象の行動に於ける或る系列を、簡明に客觀的に記述することである。科學にとつての唯一の「說明」は、概念化された記述なのである。

曩に述べた通り、吾々が新しい問題に當面した際には、それと類似の事態に於いて成功を收めた方法を用ふることが、最も賢明な道である。自然科學の方法は社會現象にも亦適用し得るといふ假說を以つて吾々が進むことが單に正當であるばかりでなく、論理の問題としても常識の問題としても斯くする義務を負ふて居るのは、正にこの見地からしてである。且つ又、社會學の分野に於いて、益々嚴格に精密に自然科學の方法を用ふる研究の增加して行くことは、この方法をその一切の根本的な諸點に於いて社會現象に適用し得ることに對する十分なる證左を提供するものである。

社會現象にも或は科學的方法の性質にも、この方法を社會現象に適用することを妨ぐる屬性が少しも內在して居らないといふ立場は、社會學的調査に關して多くの重要な結論を齎す。その中でも特に重要なのは數量的の取扱が

益々發展させられねばならぬことと、現在社會調査の發展を妨げて居る倫理的・道德家的取扱を放棄せねばならぬことである。數量的の取扱は當然統計的方法の重要性を增大せしめる。然し知識の新天地は何時でも主として主觀的・哲學的な方法に依つて開拓されねばならぬが故に、必ずしも數量的方法のみが望ましき方法ではなく、數量的方法は常に質的の方法と相携へて進まねばならないのである。數量的取扱は又、一切の社會關係が、現在他の科學に於いて用ひられて居る數學的記號に依つて敍述されねばならぬ或は敍述され得ることを意味するのでもない。あらゆる科學はそれ自身の概念・記號・論理・を作り出さねばならぬ。一科學の方法が他の科學に於いて有用であることを經驗が示す限りに於いて、他の科學と同一の方法を用ふることが許されるのである。又調査者は倫理的・道德家的態度を放棄せねばならず、彼自身の倫理的見解或は一共同體のモウレスと、調査對象とが一致すると否とに關せずして、純粹に在るが儘を敍述することに身を捧ぐべきである。又調査者が調査の結果を概括して結論を得る場合に、その結論が現在一般に行はれて居る見解と一致するや否や或はその社會秩序に對する影響如何といふやうな考慮に依つて影響されてはならないのである。

以上がルンドバァグの主張の大要である。勿論斯くの如き主張に對しては、これに對する批判的考察が併せ行はるべきであるが、この點に關する筆者の研究程度は、これらを全部他日にゆづり、こゝでは單に紹介のみに止めねばならぬ程度であることを遺憾とする。さてこのルンドバァグの主張は、單に彼一人の見解としてのみ考へられてはならない。これは同時に米國に於ける一群の社會學者の見解を代表するものとしても考へられねばならぬ。同國の新進社會學徒を執筆者として編纂された Trends in American Sociology, New York, 1929. は、その全體を通じてこの立場から書かれて居る。而して斯くの如き立場の當然の歸結は、實驗的科學としての社會學であり Pitrim Sorokin は社會學が既に實驗社會學の段階に入りつゝあることを信じ、彼自身及び P. F. Voelker, F. Allport, G. S. Gates, E. B. Hurlock, M. Parten, M. Walker 及び獨逸の A. Mayer, E. Meumann, 等を實驗的研究者として擧げて居る。(P. Sorokin, Contemporary Sociological Theories, New York, 1928. pp. 754-5.) これらは概ね社會心理學の方面に於ける研究者であつて、吾邦に於いてもこの方面に於いては實驗的研究が進められて居る。(例へば、「心理學研究」に於ける近藤貞次・松本洋の諸氏の勞作) 又佛國に於いても François Simiand が實驗的社會科學の可能を說いて居るが、(三田學會雜誌、昭和五年一二月號、フランソア・シミアン松本信廣譯「經濟學に於ける經驗の方法に就て」參照) 然し自然科學の方法の社會現象に對する適用に就いての米國社會學者の見解は、同國に發達した行動主義的心理學を主要な根據として居る獨自のものであることを注意せねばならぬ。

右の如き主張が社會調査に對して有する意義を考ふるに、假にそれが受容されたとして、斯かる方法論に基いて社會調査を科學的に進めて行くことは、社會學的調査延いてはそれに依つて影響さるゝすべての社會調査の客觀性と正確さとを增大するであらう。要するに社會調査の任務はこの方法論に基礎を置く科學的社會調査に依つて最も十分に果されると云ふべきである。又假に受容され得ぬとしても、斯かる方法論の考究それ自體が、ともすれば當面の特殊的の問題に向けられ易い社會調査家の關心を、より基本的の重要性を有する方面へ向かはしめ、且つ又主觀的・非科學的に陷りやすい調査態度をより客觀的・科學的に改めさせる上に最も大なる效果を擧げるであらう。然し乍らこれが容認されるとしても、現實の問題として近い將來にさ程大なる調査方法の進歩を齎さないのではなからうか。蓋し從來と雖も社會現象に自然科學の方法を用ふることは或る程度まで行はれて居るのであり、ルンドバァグ等の主張と單に程度に於いて相違するのみである上に、自然科學方法の嚴格なる適用方法は、それ程急速に

は進歩しないと思はれるが故である。但し斯く云へばとて、前述の如き意義を持つ方法論を輕視することは勿論出來ない。

五　結　語

重要な問題はまだ盡くされたわけではない。社會調査は社會現象の眞相を傳へて社會技術及び社會科學に貢獻し以つて社會改善に資することを目的とすることは前述したるところであるが、然らば如何なるものが社會改善であらうか。人間の健康狀態の改善や災害の防止の如き當面の局部的の問題に就いては、誰しも改善に就いて相當に明確な觀念を有する。然し根本的な全面的な問題に就いては、明確な觀念を得ることは非常に困難でなければならぬ。しかも眞に社會改善の實が擧げられるのは、斯かる意味の改善に就いて、確乎たる態度を定め得た後である。社會調査には假說が先づ設けられねばならぬ。その假說は右の如き態度に基いて立てられる時にこそ、眞に社會調査に對して重要性を與へるのである。故に調査家は先づ第一に右の如き態度を決定せねばならない。これこそ眞に基礎的の意義を有する社會調査の方法論であらう。然し乍らこの點に關しても、筆者は主としてその研究の不足から考究を他日にゆづらねばならぬことを遺憾とする。次に、この稿を終るに當つて、社會調査の語義及び筆者の暫定的なる定義を述べたいと思ふ。

先づ社會調査の最も發達した米國に於ける社會調査の語義を明かにしたいと思ふが、それに先き立つて、何故米國に特に發達して居るかの理由を一瞥すれば、その主要なるものとして(一)米國には特に實際狀態の調査を必要とする狀態の存在したこと、(二)米國社會學が社會調査に深い關心を持つたこと、の二事實が擧げられると思ふ。國が新しい爲めに一切が動的狀態にあつたこと及び多數の移民の存在は、他の國々に比較し特に同國に於いて實際狀態の調査が必要であつた。又米國社會學は Lester F. Ward 以來傳統的に社會改良に對して深い關心を示して居る。これは一つには右の如き國情に依ることが確かであるが、同時に同國に於ける社會事業關係者が行つた理論的討究に影響されたことも疑ひがない。而して社會學は社會調査を通じて社會事業の發展に貢獻すると共に自己の歸納的研究に必要な資料を得るに至り、社會調査は社會學の力に依つて發達させられるに至つたのである。まことに米國に於ける社會調査は同國現代の社會學發展にとつて、欠くべからざる用具となつて居る。

然し乍ら米國に於ける社會調査(Social research) の語義も、全く統一されて居るわけではない。パァクの如きこれを社會學的調査 (Sociological research)と同義に用ひ乍ら、(Park and Burgess, op. cit., pp. 43-46. 參照。こゝでこの二つの名稱が何の斷りもなく交互に用ひられて居る。) 社會踏査 (Social survey) と嚴格に區別せんとする人もあり、(Preface to, E. S. Bogardus, The New Social Research, Los Angeles, 1926. pp. 13-14. 參照) ボガアダスの如き、踏査とは區別せず、一方廣き意味の社會調査と狹き意味の社會調査とを認めて後者を社會學的調査と同一視し前者の中に踏査と共にこれを含める人もあり、(Contemporary Sociology, op. cit., p.406. 參照) 同じく社會調査と踏査とを區別するにしても、パァクと多少異なる見地よりする人々もある。(Nels Anderson and E. C. Lindeman, op. cit., p. 378. 參照) 明かに示されて居るわけではないが、大體に於いて、非科學的のものをも含み唯漠然と云はれる場合は、社會探査 (Social investigation) 社會研究 (Social study) が用ひられ、多少科學的のものが社會調査と呼ばれ、社會學者に依る研究の場合に社會學的調査と呼ばれ、調査の對象が一都市或は一共同體の地方的問題であり、その解決の爲め可及的に全般にわたつて、その都市又は共同體内の社會現象を調べる場合、それらを社會踏査といふ。

吾邦に於いても社會調査派と呼ばれて居る（少くとも松本潤一郎編、社會學――學說と展望、昭和七年、八一頁、に依つて）一群の人々が居り、磯村英一・古山利雄・古坂明詮・三好豐太郎の諸氏がその代表者として學げられて居る。この他農村社會學の分野に於いて調査的研究に從事さるゝ學徒として鈴木榮太郎氏のあることを注意せねばならぬ。社會調査なる名稱は、それを Social survey の意に用ひらるゝ古坂氏（社會學雜誌、第六八號）の如きを別とすれば、通常 Social research の意に用ひられて居り、Survey はこれを踏査或は測量として居る。然し乍ら Social investigation 或は Social survey なる比較的に通俗的なる用語に對して Social research なる學術語の存在する場合と比して、社會調査なる名稱は本來日常用語であるが爲めに、それを Social research の意に用ふることは不自然でもあり、且つ又混同を招く虞れもある。故に本稿に於いては、社會調査なる名稱を以つて Social research の意のみならず Social investigation の意をも含むものとして用ふることを一應試みたのである。而して Sociological research に對して、Social investigation 及び實際的・非科學的なる踏査とを、山口正氏（都市生活の研究、大正一三年、二三九頁）の用語に從つて、科學的及び實際的の社會調査の二に別けることが最も適當であると思はれる。社會學的調査法は社會學研究の一技巧であり、社會學に貢献することのみを目的として行はれるものだから、正當に社會學の一部分であると云へる。然し社會學的調査法自體は結局一つの技術に過ぎない。即ち社會學が社會現象から法則を見出すに當つて役立つところの資料を提供する技術である。必ずしも、社會學と不可分の關係にあり、社會學の本體を成して居るものとのみ思はれぬ。從つてこれを社會學から引離して、他の社會調査法と一團にし一個の技術として研究することが望ましく思はれる。曩に述べた通り、社會學的調査は社會調査法として專ら研究さるべきであるが、しかも他の社會調査法も價値ある諸點を有する。これらが同時に研究されることは、必ず大なる利益が伴ふであらう。筆者のこの考へ方は幾多の非難を受けるかも知れない。社會學的調査法を社會學から引離しそれと種々の點に於いて相違する社會事業的及びその他の調査と共に扱ふことは、まことに科學的整然さを缺くと云はねばならない。然しそれは社會調査法を一の技術として發達せしむるには、是非とも必要な方法であると思はれる。社會學的調査は、調査の前提たる假說に關し、或は調査上の種々の技巧に關して、社會學以外の方面にも助力を求めねばならず、この點から考へても獨立せしめることは有益である。要するに社會調査法を一個の獨立せる技術として考究し、その進步發達を計ることは、こゝにも科學と技術、理論と實踐の分業を成立せしめ、延いては人間知識の增大に導く所を大ならしめる所以である。社會學は社會調査の提供した資料に基いて法則を立て、社會調査は社會學の理論に依つて體系を與へられる。社會學と社會調査との間のこの依存關係は、更に社會學と社會事業とを結び着ける。即ち社會事業家はその業務の性質上最適の社會調査擔當者でもあり、且つ又調査に依つて自己の業績を檢討せねばならぬが故に、社會調査の分野にも重要な活動をする。（財部叶著、近代社會事業と方面救護の實際、昭和八年、五七―八〇頁參照）社會學は社會調査の理論的指導を與へるが故に、社會調査を通して社會事業と社會學とが結び着き、相互にその進步發達に貢献し合つて居る。

最後に、これまで論ぜられたところに依つて、社會調査の性質を稍ゝ明かにし得たと思ふが、これに基いて暫定的な定義を與へれば次の如くである。社會調査とは、社會科學及び社會技術に資料を貢献する目的で行はれる社會現象の調査であると。（昭和八年七月廿九日）